



TITLE:

本報告論文集について

AUTHOR(S):

福谷, 彬; 中山, 大将; 巫, 靚

CITATION:

福谷, 彬 ...[et al]. 本報告論文集について. 2014年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集 2015: 1-2

ISSUE DATE:

2015-02-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198433>

RIGHT:

本報告論文集について

本冊子は、2014 年 8 月 12 日および 13 日に京都大学大学院文学研究科で行われた、「2014 年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ」の報告論文集である。

2010 年の夏に京都エラスムス計画により、櫻田涼子、平井芽阿里、松谷実のり、中山大将、福谷彬ら 6 名が南京大学へ派遣され、2 ヶ月間当地で中国語の学習と、巫靚（当時：南京大学外国語学部所属）を含む南京大学社会学院の院生との共同調査を行った。その成果は、『京都エラスムス計画 2010 年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告—南京市・江蘇省南部の都市と農村—』（2011 年）にまとめられている。

2011 年の夏には再度京都エラスムス計画により、中山大将、櫻田涼子 2 名が南京大学へ派遣され、一ヶ月間の中国語学習と南京大学社会学院院生との共同調査を行ったほか、『京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム』を行った。京都大学からは中山、櫻田、両名が報告を行い、南京大学からは王華ら 3 名が報告を行い交流を行った。巫はこの際に通訳を担当した。この成果は、『京都エラスムス計画 2011 年度中国社会研究短期集中プログラム成果報告—京都大学・南京大学若手研究者共同フォーラム報告論文集—』（2011 年）にまとめられている。

2012 年は京都エラスムス計画による派遣はなかったものの、中山大将、櫻田涼子、平井芽阿里、福谷彬が計画を立て、2010 年以来協力を得ている張玉林教授と提携し、再度ワークショップの開催を実現した。この成果も、『2012 年度京都大学・南京大学社会学人類学若手研究者共同ワークショップ報告論文集』にまとめられている。

2013 年は京都大学アジア研究教育ユニットの支援を得て、南京大学の院生を招いての初の京大でのワークショップ開催となった。若手間の論評や民族学博物館の共同見学会などを図り密な研究交流を実現した、この成果は、『京都大学アジア研究教育ユニット 報告書 3 2013 年度 京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集』としてまとめられた。

本ワークショップの特色の一つは、基本的に日本語と中国語という双方にとっての母語を使用言語としていることである。しかし、南京大側の参加者は誰ひとり日本語を解さないし京大側の参加者の多くも中国語を解さない。このため、報告原稿の翻訳作業や当日の通訳などに膨大な時間と労力を割いた。とりわけ、通訳を務めてくれた院生や研究員には大きな負担をかけた。しかし、その甲斐もあって本報告書には日中両語訳の報告論文を収めることができた。

中国研究者、日本研究者だけでなく、東南アジア研究者、アフリカ研究者まで巻き込みながら、アジア言語での国際学術交流が図られている場はなかなかないであろう。英語中心のアジア国際学術交流の場は近年多いが、本ワークショップでは、自分の母語で考え、アジアの言語で分かち合うことを目指した。決して英語を排斥しようというわけではない。重要なことは、国際学術交流における「多様性」である。東アジア交流数千年の歴史を思い返し、その上にこのワークショップを接ぎ足したいのである。

京都エラスムス計画の南京派遣で参加者が感じた、分野やフィールド、そして国籍を越えた交流は、同計画が幕を閉じて、いまだなお熱を持ち続けている。ぜひ、本報告書に目を通し、東アジアの新しい世代の研究者間の交流の胎動の一端を知っていただければ幸いである。

福谷彬 中山大将 巫靚

2015 年 1 月 7 日

关于报告书

本报告书为 2014 年 8 月 12 日至 13 日于京都大学文学研究科举行的“2014 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛”活动的报告论文集。

2010 年夏樱田凉子、平井芽阿里、松谷实、中山大将、福谷彬等 6 名日本年轻学者通过京都伊拉斯谟计划被派往南京大学，在进行了为期 2 个月的汉语学习后与包括巫靓（当时为南京大学外语系学生）在内的南京大学社会学院研究生进行了共同调查。其成果为《京都伊拉斯谟计划 2010 年度中国社会研究短期集中项目报告书：南京市暨苏南地区的城乡》。

2011 年夏中山大将和樱田凉子再次通过京都伊拉斯谟计划去到南京大学，除与上年一样进行了短期的汉语学习（1 个月）以及共同调查外，还在南京大学举行了“南京大学—京都大学社会学人类学博士论坛”。京都大学方由中山和樱田进行了报告，南京大学由王华等 3 名同学进行。巫靓担任了那时的现场翻译。其成果为《京都伊拉斯谟计划 2011 年度中国社会研究短期集中项目报告书：南京大学—京都大学社会学人类学博士论坛》。

2012 年虽没有京都伊拉斯谟计划的派遣，在自 2010 年以来一直协助本计划的张玉林教授的帮助下，中山大将、樱田凉子、平井芽阿里、福谷彬再次实现了论坛的交流活动。其成果为《2012 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛报告论文集》。

2013 年在京都大学亚洲研究教育机构（KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT）的资助下，南京大学的研究生们来到日本，论坛首次在京都大学举行。年轻学者之间的相互点评以及共同参观日本民族学博物馆等，实现了丰富的学术交流。其成果为《京都大学亚洲研究教育机构 第三报告书 2013 年度京都大学南京大学社会学人类学青年学者论坛报告论文集——由‘京都伊拉斯谟计划’应运而生的学术交流》。

本论坛的特色之一是将日语和汉语，即对双方而言都是母语的语言作为使用语言。然而，南大方的参加者多不谙日语而京大方的参加者也多不会中文，因此在发言稿的事前翻译以及论坛当天的现场翻译方面花费了很多时间和精力。其中特别是给负责现场翻译的研究生和研究员增加了很多负担，但也正因如此本报告书中收录了所有发言稿的中日版本。

近年亚洲国际学术交流活动多以英语为主要使用语言，而能够实现汇聚中国、日本、东南亚、非洲研究者，并且通过亚洲的语言进行交流的国际会议并不多见。本论坛的主旨是通过自己的母语思考，利用亚洲的语言进行相互理解。当然这绝不是排斥英语，重要的是希望实现国际学术交流的“多样性”，以此继承东亚数千年的交流史。

本论坛是由京都伊拉斯谟计划的南京派遣而生，但即使是在上述计划结束后，计划的参加者们所感受到的超越自己研究领域、调查地以及国籍的交流依旧持续着。希望通过本报告书，能让更多的人了解到东亚新一代研究者们交流的最新动向。

福谷彬 中山大将 巫靓

2015 年 1 月 7 日